

Gallery of The Fine Art Laboratory

拝啓 時下ますますご清祥の事とお慶びを申し上げます。

この度、9月5日から9月29日まで、武蔵野美術大学「Gallery of The Fine Art Laboratory」にて、
柴田英里「Panoramic Confusions」展を開催いたします。是非ご高覧いただきたく、ご案内申し上げます。

柴田英里 「Panoramic Confusions」

会期：2016年9月5日（月）～9月29日（木）11：00～17：00 日・祝祭日休廊

会場：Gallery of The Fine Art Laboratory

〒187-8505 東京都小平市小川町 1-736 武蔵野美術大学 2号館 1階

主催：Gallery of The Fine Art Laboratory（彫刻学科研究室企画 問い合わせ先：042-342-6055）

※ 9月29日（木）14：40より2号館202にてアーティストトーク、18：00よりクロージングパーティーを行います。

【作家略歴】

柴田英里／Eri Shibata

1984年名古屋生まれ。

2009年武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業。

2011年東京芸術大学大学院美術研究科彫刻領域修了。

サイボーグ・フェミニズムとクィア・スタディーズをベースに、彫刻史において蔑ろにされてきた装飾性の再興、彫刻身体の攪乱と拡張をメインテーマに、美術家・文筆家として活動している。

＜主な賞歴＞

2009年 武蔵野美術大学卒業制作優秀作品賞

第12回岡本太郎現代芸術賞（入選）

アーツチャレンジあいち（選出）

2011年 アートアワード東京丸の内（小谷元彦賞）

2012年 第15回岡本太郎現代芸術賞（入選）

ブルームバーグ・パヴィリオン・プロジェクト（入賞）

2015年 シブカル杯（グランプリ）他多数。

【展覧会に寄せて】

柴田英里の三つの穴からの視線〈まなざし〉

一つの開口部を持つ穴：お皿と壺は共に一つの開口部を持ち、そのエッジを境界として内と外に分かれる。皿の場合は内側が主役で装飾が施されるが壺の場合は逆である。巨大な皿と壺のエッジに立ち内側へ滑り込んでしまったとしよう。皿の内部では表象にまみれ壺の内部では表象の外部におかれる。環境という場所の移動に伴って異なる両者の視線の跳ね返りが身体に及ぼす影響は？そして他者の視線との差異は？

二つの開口部を持つ穴：トンネル型をしており人間も口から肛門に抜けるトンネル動物であり二つの開口部で繋がっている。開口部を境界として外側はさまざまな意識や感性が支配する動物的外形美と装飾。トンネルの内側は意識されない植物的構造が機能する器官。境界としての開口部は見えない内部へと誘惑する。ならば生命器官としての内部を、手袋を裏返すように反転してみよう。無数の突起や襞がどのようなまなざしの変化もたらすか？アーケード街の逆？

空洞としての穴：たとえば墓あるいは記憶、記録の穴。無数の死者の視線は閉じられた穴に封印されている。しかしその封印が破られた時、エジプトのピラミッドや神話という穴の内部を装飾として捉えるか死後の現実と信じられたかは想像するほかない。その見えない内部を現在という外部から見た時、何かを肯定したり否定することの基準とすることが出来るだろうか？空洞の内部からの死者の視線と外部の生者の視線は、非対称でありながら共同の幻想を産み続けている？

（武蔵野美術大学彫刻学科教授 戸谷成雄）



メドゥーサの頭部／2014 年／ミクストメディア／32 x 25 x 20 cm



ゴルゴンの三姉妹／2011 年／セラミック、その他／サイズ可変



BON☆SAI／2016 年／ミクストメディア／サイズ可変



阿修羅ガールズ／2014年／ミクストメディア／120×60×180 cm